

〔釈文〕（七行目まで）

御願申上ル役高口上之覚

一豊前國宇佐郡高家郷時枝村浄土宗梵天山

善光寺者^は村上天皇御宇天徳式年戊午

空也上人開辟之地也然ルニ為本尊蒙求宇佐

八幡宮へ祈誓シ社参仕候處ニ四日市之里を過候へ者

泉之森^りより尼老人飯櫃ニ金仏之如来ヲ捧来テ上人ニ

授ク上人ノ云汝者何人ソ哉答云吾是泉廟之尼也（後略）

〔読み下し〕

御願い申し上る役高口上の覚

一豊前國宇佐郡高家郷時枝村浄土宗梵天山善光寺は村上天皇御宇天徳式年戊午空也上人開辟の地也、然るに本尊蒙求の為宇佐八幡宮へ祈誓し社参仕り候處に、四日市の里を過ぎ候へば、泉の森より尼老人飯櫃に金仏の如来を捧げ来て上人に授く、上人の云う、汝は何人ぞ哉、答えて云う、吾是泉廟（廟）の尼也、

〔大意〕

豊前國宇佐郡高家郷時枝村浄土宗の善光寺は村上天皇の時代の天徳二年に、空也上人が開かれた寺である。（空也上人は）御本尊をお迎えする為に宇佐八幡宮へお参りした。その帰り四日市の里を過ぎたあたりの泉の森を通りかかった。そこへ一人の尼さんが飯びつに金の仏様を捧げて、上人に授けた。上人が何人であるか聞いた所、泉の廟の尼であると、答えた。（この後上人は授けられた仏様を捧げ持ち、芝原の地に善光寺を開いた、という内容が書かれています。）

ところが後世に描かれた「豊前善光寺縁起絵図」（下写真参照）では「尼」が「老翁」となっていますし、「四日市の里」は「百合畑」となっています。寺の歴史の変遷の中で縁起も変化している様子があるが、しかし空也上人が天徳二年に創建した、ということとは一致しています。



〔天徳二年、空也上人開基の可能性〕

空也上人が七十歳で没したのは天禄三(972)年、善光寺を開いたのは天徳二年の時五十六歳ということになります。果たしてその頃空也上人が九州に下り、善光寺を開基した、ということがあり得るのかどうかを考えてみたいと思います。先だって東京国立博物館で特別展「空也上人と六波羅蜜寺」が開催されました。この公式図録に「空也上人・六波羅蜜寺関連年表」が掲載されています。この年表から天徳年間の前後を書き抜いてみると、

九四七〜九五六 この頃 紀伊国^{有田郡}光明寺を建立する

天暦年間 この頃 豊後国を遊歴する

この頃 伊豫松山浄土寺に止住する

九五七〜九六〇 大和長谷寺に参詣する

天徳年間 大和添上郡勝部寺に止住し、水晶を掘り出す

雲林院に住む

九六二応和二年 この頃 千葉内供山云い「捨ててそと」

となっています。年表の記述順に足跡を辿ると

紀伊国→豊後国→伊豫→大和→京都（雲林院）と、空也上人の足跡は残されているようです。九州の足跡は「豊後国」とだけあり、詳細は明らかではありません。しかし善光寺の創建天徳二年の前後を調べると、

天暦年間 山香 小武寺創建

天暦年間 杵築 利益寺創建

九五八（天徳二） 豊前 善光寺創建

九五九（天徳三） 国東 興導寺創建 「空也池」を掘る

九六〇（天徳四） 日出 願成就寺創建（中興）



という言い伝えが残っているようです。この一連の空也伝承について『空也上人の研究―その行業と思想―』で石井義長氏はこう述べています。「空也の京都における行業に天暦後から天徳年間にかけての五十歳前半の空白の期間が想定されることから、これらの言い伝えが有り得たという可能性も一概に否定できないと思われる。」また、『善光寺史』を著した坂井衡平氏も「空也が京都に念仏開宗後善光寺（信濃）に詣で、九州に教化して本寺（豊前善光寺）の開基に与り、帰京して六波羅蜜寺を建立したと見るのは誤りではあるまい。」と述べています。これらのことから、天徳二年、豊前善光寺創建の言い伝えもあながち否定できないように思われますが、いかがでしょうか。